

(別紙様式2 ②)

議員報告書	
1 議員名	浅枝 久美子
2 期 日	令和7年11月12日 ~令和7年11月13日
3 研修先等	1日目 徳島県上勝町 2日目 徳島県海陽町ほか
4 内容(目的)	地産事業の取組及び私鉄経営の取組の調査研究
5 報告事項	
◆概要	
11/12 <1日目>	
葉っぱビジネスとゼロ・ウェイストから学ぶ、人口1,294人の挑戦 一上勝町視察	
<ul style="list-style-type: none">視察地：徳島県勝浦郡上勝町人口構成：1,294人・約700世帯高齢化率：52.8% (全国でもトップクラス)特徴：面積の9割が森林、杉の人工林が80%主要産業：農業	
上勝町のキャッチフレーズは「こたえは、ここにある。」	
実際に訪れてみると、その言葉の意味が町の至るところから感じられた。	
1. 「彩(いろどり)」葉っぱビジネスの学び	
(1) 事業誕生の経緯	
<ul style="list-style-type: none">昭和61年、ミカン産業の壊滅を機に、横石知二氏が“葉っぱ=妻物”に着目し新産業を創出。町民は当初冷ややかで、賛同したのはわずか4軒の花木農家。社長自ら京都の料亭に通い、妻物の使い方を学び、農家へ「絵」を描いて伝える。この徹底的な“現場主義”が基礎となった。	
(2) 成長の要因：仕組みで農家を主役に	
<ul style="list-style-type: none">IT活用の早さ：コンビニ方式を参考に、受発注システムを確立。早朝の“注文取り”→即収穫→12時までにJAへ納品というリズムを農家が主体的に組み立てる。軽量作物で高齢者・女性が活躍しやすい。農家への声かけは「商品」ではなく「個人」へ「家、きれいだね」と“自尊感情”に寄り添うコミュニケーションが農家の意欲向上につながった。成績表やランキングを可視化し、ゲーム性でモチベーション向上。	
(3) 現在の彩(株式会社いろどり)	
<ul style="list-style-type: none">出荷者136名、平均年齢70歳。年商は2億8千万円(昨年度過去最高)。	

- 商品は 100 種類以上、特に「ナンテン」「青もみじ」で売上の約半分。
- 多品種・少量・個選個配・短納期が強み。
- 棚田の新たな活用としてレンコン葉・葉ワサビなど新商品開発も進む。
- 杉人工林を糸に加工する“KINOF”など新規事業も展開。
- 後継者不足の課題に対し、研修生受け入れ・地域おこし協力隊の活用で人材育成。

(4) 安芸高田市への示唆

- 中山間地の不利を逆に“強み”に変える視点。
- 高齢者の生きがいと所得向上を同時に満たせる仕組みづくり。
- デジタルを小規模でも大胆に取り入れる姿勢。
- モチベーションを引き出す“設計”が成果を生む。

2. ゼロ・ウェイスト宣言の学び

(1) ゼロへの挑戦の歴史

- 1990 年代：野焼き中心 → 法改正で焼却場建設 → 3 年でダイオキシン問題により閉鎖。
- 多額の外部運搬コストに苦しみ、2003 年に日本初「ゼロ・ウェイスト宣言」。
- 世界では 100 以上の自治体へ広がる先駆的存在。

(2) 上勝町の仕組みと工夫

- ゴミ収集車が走らない：住民がリサイクルステーションへ持ち込み。
- 45 分別、さらに各ごみ箱に
 - 行き先
 - 処理費用
 - 買取価格
 を表示し、「見える化」による納得感を醸成。
- 高齢者には 2 ヶ月に 1 度の運搬支援（委託、2 人体制）。
- くるくるショップ：不要品を持ち寄り無料で交換。昨年 6.5 トンが再利用。
- リサイクル率は 80% に到達。
- 生ごみは各家庭で堆肥化（電動処理機導入、市の補助で自己負担 1 万円）。

(3) 町民を動かした工夫

- 分別に抵抗感があった当初
 - 県の指導（外圧）
 - 「子どもたちの未来を守る」という大義
 - 彩（いろどり）だけでない“町の誇り”づくり
 - ちりつもポイント（資源化でポイント → 商品と交換。体操服など半額に）
これらが住民の行動を促した。

(4) ゼロ・ウェイストセンター「WHY」

- 宿泊施設・交流スペース併設。
- 窓は町民の寄付品を活用。家具もアップサイクル。
- 企業との協働（例：花王の詰替パック水平リサイクル）も進む。

- ・ 体験型滞在“INOW”では彩やゼロ・ウェイストを長期滞在で学ぶプログラムがある。

(5) 安芸高田市への示唆

- ・ 分別を促すのは“義務”ではなく“納得”と“楽しさ”。
- ・ 見える化、ポイント制度、学校との連携などは即応用可能。
- ・ ごみ問題と地域ブランドを結びつける視点が重要。

3. 共通する成功の本質

(1) 住民が主役になる仕組みがある

葉っぱビジネスもゼロ・ウェイストも、“やらされる”のではなく“自分たちでやる”構造が設計されている。

(2) 小さな挑戦を積み上げる文化

人口が少ないからこそ、挑戦と改善のスピードが早い。失敗は責めない、“まずやってみる”風土が根付いている。

(3) 地域資源の価値を編集し直す力

葉っぱも、ゴミも、棚田も「そこにあるもの」を組み替え、全く新しい価値を生んでいる。

◆成果または所感等

上勝町は、決して“特別な町”ではない。急な山、少ない平地、生産性の低い棚田、高齢化の進行……むしろ多くの中山間地が抱える課題をそのまま持つ。しかし上勝町は「課題を価値に変える編集力」「住民が輝く仕組みづくり」によって、日本中から視察が訪れる町へと変貌した。特に印象に残ったのは

- ・ 高齢者がタブレットを使いこなす
- ・ 軽やかに葉っぱを収穫する
- ・ 町全体が“挑戦”の空気に包まれている

安芸高田市も、一次産業と環境を柱にまちづくりを進めいくべきである。今回の視察は、「人口規模や条件はハンデではない」という強い勇気を与えてくれた。

◆概要

11/13 <2日目>

— 世界初のDMV運行から学ぶ、中山間地域の新たな公共交通モデル —

1. 視察の概要

- ・ 視察地：徳島県海部郡海陽町
- ・ テーマ：DMV（Dual Mode Vehicle=デュアル・モード・ビークル）の導入と運用
- ・ 運行主体：阿佐海岸鉄道株式会社

- DMV 開業：2021 年 12 月（鉄道開業 30 周年のタイミング）
- 特徴：
 - 世界初の営業運行
 - バスモード（道路走行）と 鉄道モード（線路走行）を 1 両で切り替え
 - マイクロバスをベースに改造

地方鉄道の課題（利用者減・維持費負担）に対し、“世界初の実装”という挑戦で注目を集めている。

2. DMV とは何か（概要）

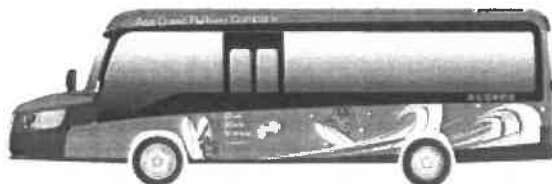
DMV 車両の愛称・デザイン

- ▶ 車体のカラー「青」「緑」「赤」は、現在運行中の「ASA-100系」で描かれた色を取り入れられました。
- ▶ 応募作品の選考にあたり、各車両に「阿佐東地域」「徳島県」「高知県」の特色がバランスよく盛り込まれていることが評価されました。

DMV-1号

未来への波乗り

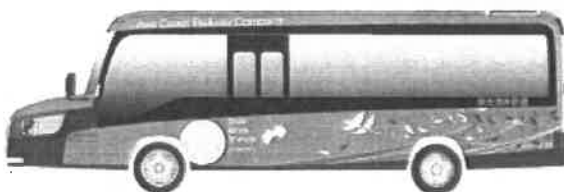
太平洋の波をダイナミックに表現し、阿佐東地域で盛んなサーフィンや、穴喰駅の「伊勢えび駅長」をデザインに取り込み、「未来に向かってチャレンジする」イメージです。



DMV-2号

すだちの風

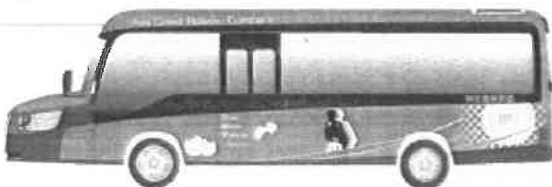
徳島県の名産「すだち」と、すだちの葉が風に舞い、その中を「徳島県の鳥・しらさぎ」が「空高く舞い上がる」イメージです。



DMV-3号

阿佐海岸維新

- 高知県の英雄「坂本龍馬」と、南国土佐に輝く太陽が描かれており、革新的な乗り物DMVが「地域活性化の維新を起こす」イメージです。



◎ DMV の特徴

- ボタン操作で バス→鉄道 モードへ自動変換
- 道路から鉄道への変換は約 15 秒
- 車体はマイクロバスで、鉄道モード時は鉄車輪で走行
- 鉄道とバスの“隙間”を埋める公共交通 として評価されている

◎ 海陽町が DMV を導入した理由

- 人口減・利用者減で“鉄道単体”の存続が困難
- バスとの複合運行で、沿線住民の移動権確保
- 観光資源としての魅力向上（実際、観光客が増加）

3. 現地での説明と質疑より

(1) DMV の認知度

- 鉄道系セミナーでも、3割程度の認知度
- 鉄道ファンが多い東京セミナーでは午前のトークショーで 7~8 割→夕方で 3 割ほどに低下
→ 一般住民への認知はまだ限定的で、**“専門領域の乗り物”**としての印象が強い。

(2) DMV の長所

- 鉄道と道路をシームレスに走行
- 駅～観光地～集落を一本の車両でつなぐことが可能
- 鉄道の維持費削減とバスの機動性を併せ持つ
- 鉄道好きからの注目が高く、「観光消費」としての価値あり

(3) DMV の弱点・課題

◎ 収容人数が少ない

- マイクロバス仕様のため 最大乗車数は約 20 名
- 混雑期は捌ききれない可能性

◎ 降雪地帯では除雪が必要

- DMV 専用の除雪体制が不可欠
- 海陽町では課題とならないが、他地域展開に影響大

◎ 踏切では減速が必要

- 安全のため必ずスロウダウン
- 生活踏切でのテストは未実施

◎ アップダウン（急勾配）は未検証

- DMV 導入の可否判断で重要なポイント
- 海陽町は比較的平地のため課題が顕在化していない

(4) 運行・制度面

◎ 車検は「道路運送車両法」と「鉄道事業法」の両方が必要

- DMVは“車”としても“鉄道車両”としても登録
- ナンバープレートも装着

◎ 将来的なEV化（電気DMV）は？

- 当初は検討したが①車重がEV化に耐えない②開発期間が長期化、のため現状はディーゼル車。ただし将来は「否定できない」と回答

(5) 地域交通との連携

◎ タクシー・オンデマンド・ライドシェア

- 当初は導入タイミングが噛み合わなかった
- 今後の公共交通会議で議論進行中
- DMV × 地域バス（海洋バス）との統合運行も検討可能

4. DMVプロジェクトの意義

DMVは世界初の技術実装として注目されているが、本質は「交通弱者の移動を守る」ことにある。

(1) 地方鉄道の“新しい生き残りモデル”

- 利用者減で廃線寸前だった阿佐海岸鉄道を、「鉄道+バスのハイブリッド交通」として再生
- 経営改善だけでなく、観光面での訴求力が向上

(2) 小規模自治体でも導入できる

- 車両はマイクロバスを改造
- インフラ投資は“最小限の線路+モードチェンジ設備”
- 財政規模の小さい地域にとっても選択肢となる

(3) 観光と生活交通を両立

- DMV自体が観光コンテンツ
- 生活路線としても利用可能
- 住民・観光客の双方にメリット

5. 安芸高田市への示唆

(1) 中山間地域の交通課題に対して

- DMVは「鉄道の代替」ではなく“公共交通の再編集”
- 鉄道・バス・オンデマンドの組み合わせ次第で、高齢者の移動確保や観光アクセス改善に活用可能。

(2) 既存路線の再活用の視点

- 旧鉄道跡地や廃線活用の新モデルとして参考性が高い。
- DMVの“モードチェンジ”概念は、設備の再利用という観点で相性が良い。

(3) 観光戦略としての可能性

- DMVのように“乗ること自体が目的になる交通”は観光価値が高い

・ 「ストーリー性のある交通」は地域ブランド作りに寄与

◆成果または所感等

DMV は単なる技術ではなく、「公共交通を守り抜くための、地方の知恵の結晶」だと強く感じた。海陽町のように人口減少と財政制約の中でも、鉄道の廃止に諦めず、バスと鉄道の“良いとこ取り”で、住民の移動と観光の両立を図る取組は素晴らしいと感じた。その姿勢は、安芸高田市の交通検討にも大きなヒントを与える。特に印象的だったのは、海陽町の担当者が繰り返し語った「地域を守るために、世界初に挑んだ」という言葉。自分たちが起こした行動によって、周りに波及効果が生まれていることを誇らしく語られていた。小さな町でも、工夫と覚悟で世界に誇る取り組みが生まれることを体現していらっしやった。

◆2日間の所感とまとめ

上勝町と海陽町の視察を通じ、小規模・中山間地域でも仕組みと挑戦によって大きな価値創出が可能であることを改めて実感した。特に上勝町は、かつて私自身が葉っぱビジネスに強く興味を持ち、写真集まで購入した思い出があり、念願の地を訪れることができたことは感慨深かった。想像以上の山深い地域で、視察中も住民にほとんど出会わないほど過疎が進む中で、町全体が一致団結し、新しい産業やゼロ・ウェイストに挑む姿には強いコミュニティの力を感じた。行政・議員・住民という枠を超え、“個の力”が立ち上がり、そこへ共感した仲間が連鎖していく、その積み重ねが上勝町を唯一無二の地域にしているのだと思う。一方、海陽町ではDMVという世界初の仕組みで公共交通を再構築し、観光と生活の両立を図っていた。両町に共通するのは、地域資源を編集し直し、住民が主役となる仕組みを丁寧に作り続けている点である。安芸高田市でも、地域の強みを再定義し、新しい価値を創り出す視点をさらに磨きたい。